
事業報告

平成 15 年度
公開講座概要

奈良大学総合研究所では、毎年、生涯学習教育および大学開放の観点から、また大学における研究成果の社会への還元方法の一つとして、「公開講座」を開催している。

本年実施した「公開講座」は、(1) 本学が企画・共催、(2) 研究機関が企画、(3) 自治体等との協力で企画、の3種類で行われた。以下、講座について紹介するが、開催日時・会場・講師および演題は、次頁以降に記載しているので、ご参照いただきたい。

【1に分類される講座】

〈1〉第2回奈良大学特別講演会

〈開講年〉2001年 〈テーマ〉古代史や世界遺産にまつわる話題
 〈募集定員〉1,000名 〈応募者〉1,014名 〈受講者〉688名

〈2〉せいぶ市民カレッジ・第24回奈良大学文化講座

〈開講年〉1980年 〈テーマ〉奈良をメインにした話題
 〈募集定員〉各回300名（5回） 〈応募者〉1,194名 〈受講者〉957名

〈3〉第3回世界遺産公開講座

〈開講年〉2001年 〈テーマ〉世界遺産に関する話題
 〈募集定員〉各回100名（6回） 〈応募者〉1,556名 〈受講者〉717名

〈4〉第12回桜井市生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

〈開講年〉1992年 〈テーマ〉地元密着および教養全般（混合形態）
 〈募集定員〉100名 〈応募者〉79名 〈平均受講率〉59.4%

〈5〉第11回都祁村生涯学習シリーズ・奈良大学教養講座

〈開講年〉1993年 〈テーマ〉地元密着および教養全般（混合形態）
 〈募集定員〉50名 〈応募者〉55名 〈平均受講率〉59.7%

〈6〉第16回社会学部連携講座

〈開講年〉1988年 〈テーマ〉現代日本の社会が直面している基本問題
 〈募集定員〉40名 〈平均受講率〉55.8%

【2に分類される講座】

〈1〉公開講座フェスタ2003（阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット）

〈加盟年〉1999年 〈目的〉学習機会を継続的に提供し、学びを支援する
 〈募集定員〉180名 〈応募者〉178名 〈受講者〉148名

【3に分類される講座】

〈1〉奈良県大学連合講座

〈開講年〉2003年 〈テーマ〉公立学校教職員自主研修の充実支援
〈募集定員〉50名 〈応募者〉34名 〈受講者〉33名

〈2〉生涯学習大学特別講座

〈開講年〉2001年 〈テーマ〉県民の学習を支援する指導者に対する指導
〈募集定員〉各回100名（2回） 〈応募者〉122名 〈平均受講率〉61.0%

〈3〉第6回こおりやま市民大学

〈開講年〉1998年 〈テーマ〉心の豊かさ、豊かな教養を身につける
〈募集定員〉100名 〈応募者〉84名 〈平均受講率〉81.5%

第2回 奈良大学特別講演会

—奈良発「世界遺産学事始—歴史を体感する講演会—

12月13日

吉野における神と人

上野 誠

現代人が、「自然と人間」というテーマで、何かを語ろうとするときには、意識をしないまま「人間」を「自然」から分離して考察を進めることが多い。「自然」対「人間」という思考の枠組みである。それは、「人間」と「神」という思考の枠組みにもあてはまる。

とすれば、「自然」から分離された「人間」が再び統合され、「人間」から分離された「神」が再び統合される「時」や「場」もあるはずである。それを今回は、儀礼の「時」と「場」や、吉野という土地の「磁場」というようなものに着目して観察してみたい、と思うのである。吉野における自然、吉野における神は、人間とどのような関係にあるのだろうか。それは、そのまま世界遺産の指定を受ける吉野の聖地性を考えることになる…と思う。

12月13日

人類の記念物

國學院大学教授 小林 達雄

人類は600万年以上の長い歴史のはてに遊動的な生活から定住的生活へと大転換を図った。

この最初にして最大的人类史上の大事件がヨーロッパでは農耕を基盤とした新石器革命、日本列島ではいわゆる縄文革命である。

定住的なムラには、複数の家族がイエを構えた。さらに生活が費用とする食料貯蔵庫、ゴミ

廃て場、公共広場、マツリの間や共同墓地などの諸施設を次々と設け、全く新しい人工的景観を演出した。つまりムラは周囲の自然との差異を明瞭に際立たせた。この人工的空間に立った人間は自らを自然との対極者と自覚する契機を得たのである。

やがて、新たに記念物を構築し、自然との距離を画しながら人間意識、主体性確立へと歩を進めたのである。

12月13日

平城京の宗教考古学

水野正好

生きた人間の想いを考古学は、いかに明らかにできるのか。生まれ出る苦しみ、老いゆく不安、病への憂い、死への悲しみ、それらを考古学はいかに明らかにできるのか。わたしが、「まじない」に注目するのは、そのまじないにその時代を生きた人間の想いが凝縮されていると考えるからである。今回の講演では、平城京に生をおくった人々のそういった精神世界を考えて行きたいと思っている。また、「まじない」は、すぐれて流行し、伝播する文化でもある。律令国家の理想とした中央集権的支配は中央と地方、地方と地方の文化交流を、量的にも質的にも増大させ、そのエネルギーの一端をまじない、宗教に担わせている。そういった平城京生活する人々や地方を支える人々の信仰生活について具体的に話していきたい。

第24回 奈良大学文化講座

9月13日

南北朝の内乱と南都 — 「太平記」の世界から —

長坂成行

鎌倉時代の末から南北朝時代は内乱の時代といつてよいだろう。旧都奈良には東大寺・興福寺をはじめとする寺社勢力があり、内乱に深くかかわった。倒幕計画が漏洩し京都を脱出せざるを得なかった後醍醐天皇は、比叡山延暦寺に行幸したと見せかけて、実は東大寺の勢力を頼ろうとした。結局、笠置山にこもった天皇は合戦に敗れ北条氏に拘束されるのだが、延暦寺にいた皇子大塔宮護良親王は混乱のなかを脱出し、熊野を目指しその途中、南都の般若寺に潜む。『太平記』はここで敵兵に囲まれ、唐櫃の中にかくれ探索をのがれた官の、機転のきいた行動を戦慄的に描く。同時代の説話集に載る話や『太平記』の異本の記事など、般若寺での脱出談にかかわるいくつかの類話を紹介しつつ、最後は父後醍醐天皇から疎まれ、鎌倉で謀殺された悲劇の皇子の生涯をたどってみる。

10月4日

七大古都、北京、世界遺産

森田憲司

中国での都は、他の都市はまったく違う存在です。それは、世界の中心であり、世界は都から同心方状に文明から野蛮に向かっていくとイメージされています。また、中国の都市を特徴づけるのが、城壁都市の存在です。人々の城壁への思いは、1960年代に交通の障害として破壊された城壁を復活させ、それを観光資源としようとしていることからわかります。城壁は商売になるようです。

中国には五大古都、六大古都、七大古都、という言葉があります。西安、洛陽、北京、南京、開封に杭州、安陽を加えるのですが、さらに鄭を加えて八大古都にしようとする動きもあるとか。これで正統王朝のほとんどがカバーされています。

さて、北京ですが、北京こそ古典（周禮）の中に書かれた都のあるべき姿を具体化した、唯一とっていい都です。しかし、現在の北京は、モンゴル民族が建てた元王朝の時代にできあがりました。元朝といえは、中国の伝統文化を破壊し冷遇した時代のように思われますが、最近の学界の見解は、むしろ尊重した方向が強調されています。都のプランもその一つのあらわれといえます。

10月18日

「水の都」の暮色

三木理史

日本の多くの大都市は、河口に栄えた水の都であり、それらは水上交通の便との関わりが大きかった。近世までの交通は人が陸上、物が水上の移動を前提とし、それら水の都では水路の往來を基準にした街づくりがなされてきた。しかし、明治以後の都市と交通の変革のなかで水の都は、次第に「陸の都」へと姿を変えてきた。

大阪は、海港をもたない京と大和の外港都市として淀川や大和川と結ばれることで機能する水の都として成立した。天下の台所とよばれた近世には全国の物資、特に米が集散し、それらが都市内の水路を利用して運ばれたため、まさに水の都として栄えた。ところが、1704年大和川付け替えによって、大坂はまず大和との直通路がなくなり、さらに明治に入って蔵米機能が衰退して全国からの米穀輸送が減少すると、水の都としての機能は次第に衰退しはじめた。しかし、大阪が商工都市として発展したため、米に代わって動力を支える石灰輸送が水路を利用して行われ、辛うじて水の都の面目は保たれることになった。

ところが、大正期からの郊外化の進展により、都市域は内陸部に向けて拡大し、次第に水運による物資輸送が困難な地域が増加した。また、折からの鉄道、自動車の発展が水運の活動領域を侵し、次第に水の都は過去のものとなっていった。

11月29日

能への誘い

金 春 穂 高

日本を代表する古典芸能の一つであり、しかも平成14年には、ユネスコの「世界無形遺産」に認定を受けながら、現代日本人の能に対する関心は低いのが現状である。これに対して、昔からの伝統を守りつつも現代人に関心を持ってもらえるような普及活動を行うことも、今の能楽師には大切なことと言えよう。

「都の風景」とのテーマに対して、謡曲の中で都の風景や景色を謡うものはいろいろあるが、地元奈良のことを考えると限られてくる。そのような中で、能として作曲されたものではないが、独吟用として江戸時代中期に作られた「奈良八景」という謡が伝わっており、これを取り上げ、参加型の講座として、一同で謡いながら八カ所の景色を確認しながらの体験学習を行った。謡曲の題名としては「奈良八景」であるが、俗に「南都八景」と呼ばれていた奈良を代表する名所があった。

ちなみにその八カ所の景色とは、「南円堂の藤」「猿沢の池の月」「佐保川の螢」「春日野の鹿」「三笠山の雪」「東大寺の鐘」「轟橋の旅人」「雲井坂の雨」となる。本曲は、サシ、クセのみの構成でできており、サシの部分に一カ所と、クセの部分に七カ所謡い込まれており、大和四座筆頭の金春流に伝わる曲である。

12月20日

木簡からみた日本と韓国

東 野 治 之

木の札に文字を書いて、通信や記録の手段にすることは、古代の中国に始まる。日本や朝鮮には、この方法が伝えられ、古代には広く用いられていた。ただ、中国の木簡では、綴り合わせて巻物とする冊書と、一枚で表裏を使う牘の両種があるのに対し、日本や朝鮮の木簡については、冊書が存在しない。日本や朝鮮で木簡の使用が始まったころには、巻物は紙にかわって、牘の用法だけが、紙の文書・記録と併用されたのである。

日本は直接には朝鮮から木簡の使用を学んだと考えられ、記載内容にも類似するものが少ない。ただ、日本は桧や杉などの良材に恵まれ、ふんだんにこれらを使っているが、朝鮮は木材に恵まれない土地柄であるため、ほとんどの木簡が松材で作られており、見ためも荒けずりな印象を受ける。日本の古代木簡は30万点と、韓国の300点あまりをはるかに上回るが、韓国での増加が今後見込まれるにせよ、日本が木簡の大消費地域であった可能性も十分考えられる。

第3回 世界遺産「公開講座」

テーマ：「世界遺産を学ぶ」

回	開催日	講師	演題
1	平成15年 4月13日(日)	奈良大学 元教授 笥久美子	長安と奈良のえにし —さまざまな伝説—
2	平成15年 5月11日(日)	教授 西山 要一	大仏さんの保存と環境
3	平成15年 6月15日(日)	教授 東野 治之	古代の石碑文化
4	平成15年 7月13日(日)	講師 土平 博	世界遺産と都市のかたち
5	平成15年 8月10日(日)	助教授 上野 誠	あをによし奈良の都は咲く花のには ふがごとく—万葉びとの宴—
6	平成15年 9月14日(日)	教授 水野 正好	世界文化遺産—古都奈良の文化財—

4月13日

長安と奈良のえにし
—さまざまな伝説—

笥 久美子

中国・唐代の長安は、当時すでに国際的な規模百万の大都市でした。奈良時代の日本にとっては、先進文明をまなぶ最大のメッカだったといえます。その長安をはじめ、中国の各地を訪ねた私たちの先輩は、文字、暦法、仏教、文物、建築、医学、薬学など、多方面の文化を摂取するのに大いに貢献した先達で、今日の日本を作る基礎を作った人たちですが、その人たちの人生には、哀歓もごもの物語がありました。たとえば、同じ時に遣唐留学生として派遣された安部仲麻呂と吉備真備は、対照的な人生を歩みます。唐王朝の宮廷官吏として昇進した秀才・仲麻呂は、ついに帰国を果たせませんでした。一方の吉備真備は、先進的な学問を学んだのち、帰国して国の朝政に重きをなした、というふうには比較されるエリートたちの一生はさまざまなドラマを残しました。折角選ばれて留学しながら、ドロップアウトしたり、女色に身をもち崩したりするような男もいました。昔も今も、どこに行っても、世の中には似たようなお話があるものです。

5月11日

大仏さんの保存と環境

西山 要一

奈良大仏（東大寺盧舎那仏）は、天平勝寶4年（751）に完成した。その後、治承4年（1180）と永祿10年（1567）の2度の炎上と2度の再建を繰り返し、現在の大仏は膝までが天平時代、腹部が鎌倉時代、胸以上が江戸時代の造作となった。この大事業を成し遂げたのは、奈良の人々の大仏に対する信仰と再興の情熱であったことはいままでもない。

さて銅合金で造られ金鍍金された大仏は、雨や大気汚染に直接に曝されないことと毎年のお身拭いで美しい姿に甦るので腐食・劣化は問題視されてこなかった。しかし、細かく観察すると、蓮華座や像の髷・隅などに黄緑色や緑色の錆の発生が認められる。

2002年8月に始めた大仏殿の環境観測では、堂の内外の温度差はすこしあるものの湿度の差はほとんどない。大気汚染は堂内は堂外に比して、二酸化硫黄は15%減、二酸化窒素は17%減、塩化物イオンは66%減で、室内では濃度は下がるものの、外気の室内への流入とともに多量の大気汚染物質が侵入している。また、大仏のお体に積る塵埃の分析では錆を発生させる陰イオン（ Cl^- ・ NO_2^- ・ NO_3^- ・ SO_4^{2-} ）が多く含まれ、錆発生の原因の一つと認められた。

大仏に積もった塵埃を除く大仏のお身拭いは、大仏の腐食防止の極めて効果の高い方法であるが、私たちの世代で大仏が損傷しないようさらに努力が必要である。

6月15日

古代の石碑文化

東野 治之

日本には、数多くの古い文化財が残されている。しかし石造物は全体的に少なく、とくに石碑については、中国や朝鮮半島に比べ、残存数に雲泥の差がある。この点は古くから関心をもたれ、日本列島に建築や彫刻に適した石材の少ないことが主な理由とされてきた。しかし、この差は、単に自然的な条件からだけでは説明しにくく、文化的な条件がそこに働いていると考えなければならない。

そこで石碑が社会で果たした役割を見ると、中国では貴族や役人など、個人の業績を称えた碑が極めて多く、古代から法律による規制の対象とされてきた。それは虚偽の記載による社会的影響をくいとめるためである。日本では、古代はもちろん、江戸時代になるまで、石碑の建立は低調であったが、それは漢字・漢文を理解できる人口が少なく、石碑のように不特定多数に向けた媒体が、十分効果を発揮できなかつたためであろう。

7月13日

世界遺産と都市のかたち

土 平 博

世界遺産には、自然遺産・文化遺産・複合遺産の3種類がある。文化遺産の占める割合が高く、そのうえ都市を登録対象にしたものが多い。本講座ではそれらを「都市的遺産」としてみていく。「都市的遺産」には、都市を面的に登録した場合や都市内の建築物や構造物など点的に登録したものがみられる。

京都や奈良の場合、社寺などの資産を中心にしながら緩衝地帯や歴史的環境調整区域を伴い都市全体が歴史的保存の対象にされている。ただし、京都の場合、広範囲の寺社が登録対象となっているため画的連続性が弱い。その一方で、奈良の場合、資産となる寺社が比較的近接した位置にあり、この資産をとりまく緩衝地帯と歴史的環境調整区域が接続しているために面的連続性は強いといえよう。このことは観光に対しても影響を及ぼしているといえよう。奈良の場合、短時間に周遊観光が可能となり、観光客の「見てみたい」という要望に合っている。たとえば、民間バス会社による定期観光バスの周遊コースに「世界遺産コース」と冠したいくつかのコースが設定されていることは、その一例である。

平城京、近世の奈良町、近現代の奈良という時代の異なる都市的要素が融合し複雑な都市構造をもつなかで、社寺が時間軸において連続性をもちつつ変遷する都市の核となっている。

8月10日

あおによし奈良の都は咲く花の にほふがごとく一万葉びとの宴

上 野 誠

宴というまでもなく歌の母胎である。なぜならば、万葉歌の多くは宴で歌われているからである。つまり、万葉歌の第一の享受者は宴の参加者ということになる。したがって、歌の内容も宴の開催趣旨や参加者の性格に左右されるということを念頭において考える必要がある。

これを逆に歌の鑑賞ということから考えると、歌の表現を歌の場に戻すことをしなくてはならない。そういう作業を通じて、我々は万葉歌というものを体感できるのである。古都奈良の世界遺産は、万葉のびとの世界遺産といっても過言ではない。宴の復原と歌表現の分析は、世界遺産を作った人びとの心性を探ることにもなるのである。

9月14日

世界文化遺産 —古都奈良の文化財—

水野正好

聖武天皇の発願のもと、菩提僊那や良弁・行基によって建築された東大寺は質量とも日本最大・最高の寺である。平安時代、平重衡に焼打ちされたものの後白河法皇や源頼朝、多くの衆庶に支えられて重源上人は伽藍の大半を復興する。その過程では東大寺復興の資材を調達する莊園があり、各莊園にはすばらしい寺院、卓越した仏像、心いやす湯屋を揃え、働く人々を極楽へと迎える法会儀式を整えるなど、時代の先端を行く福祉に彩られる再興事業があった。戦国時代、松永勢は三好・筒井勢と闘うなかで東大寺は再度大仏殿焼亡、盧舎那大仏も大破焼損する。道安1個人による銅板による大仏再興はなっても大仏殿の建造は不可能、大仏は露仏としてその命脈を保った。

元禄時には露仏であった大仏の頭部は朽損、東大寺公慶上人が再興を企て、幕府・各藩の援助を得て頭部鑄造を果し、さらに大仏殿再興へと進む。こうした過程は、良弁・行基・重源・道安・公慶上人といった卓越した強固な意思と創意、緻密な計画とカリスマの性格が働き人々を動かして今日の東大寺の寺観を生み出していると教える。興福寺や唐招提寺・薬師寺・元興寺・春日大社にも同様、今日の寺社景観を生むその都度のエネルギーが息づいている。

世界遺産に登録されていく、その由縁はこうした歴史に輝くエネルギーあつてのことであったことをいま深く想い知るのである。

第12回 桜井市生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

5月25日

日本人と交渉

大村喬一

わが同胞は海外で、しばしば土産品の価格を押し上げている元凶だと批難されることが多い。世界では先進国を除けば、物価はすべて交渉次第という法則がまかり通っている。交渉下手な日本人には原則として通常価格の5倍、10倍という値段をふっかけることが当たり前になっている。このような日本人が政府・民間を問わず、外国との交渉において成功するのは極めて稀だと云わざるを得ない。でも聖徳太子の昔から明治維新に至るまで、決して負け戦ばかりだと云う訳ではない。どうやらこの交渉下手は、敗戦後の日本にあてはまるだけなのではないだろうか。ではどうして敗戦後日本はこうも交渉下手になったのだろうか。その根本原因とこれからどうすべきかについて私案を述べることにしたい。

6月15日

桜井の古代史は日本一楽しい

水野正好

桜井市は古代の帝都ひしめく地である。山辺の道、上ツ道は南北に貫通する交通の要地だけに道ぞいの港や市もにぎやかに営まれていた。『魏志』に出てくる倭国女王卑弥呼・台与の時代は都は天理市大倭の地に所在したと考えるが、崇神天皇は三輪山西麓の水垣の地に磯城瑞籬宮を営み、続く垂仁天皇は巻向珠城宮、景行天皇は巻向日代宮を営む。三代の都が山辺の道、上ツ道ぞいに連続して所在しているのである。これらの都をとりまいて古代の豪族が国名を冠した集落をつくっている。三輪山の西麓には出雲氏が住む。三輪山―大神神社の神は大物主―大国主命である。出雲の神であり、出雲の出雲氏が大和に出て朝廷で活躍する姿がそこから読みとれるのである。その西には吉備出身の吉備氏の集落が、その北には尾張国から大和に出て朝廷で活躍する尾張氏の集落が見られる。そうした環境の中から“前方後円墳”といった巨大な王族の墳墓が生まれ、この地域に都を営んだ天皇の権力を誇示することになるのである。

6月29日

パリのモニュメント (歴史的建造物)を巡って

田中良

パリ市は東西12キロ、南北9キロで、現在の奈良市の約半分の面積にすぎない。その決して広くない空間の中に、歴史的建造物が満ちあふれている。様々な時代に様々な建物が建てられ、それらにははっきりと時代の刻印が押されている。そうした建造物が同時代の中で、静かに共存しているのがパリである。数世紀にわたってフランスのさらにはヨーロッパの首都であり続けたパリという都市の身分証明とも言える。1～2世紀に造られた古代ローマの遺跡もあれば、現代の文化を集約したポンピドゥー・センターもある。教会の権威を象徴するノートル・ダム寺院がある一方で、ナポレオンの権力を現在なお彷彿とさせる凱旋門が聳えている。また中には、エッフェル塔のように、建設当時轟々たる批判的になりながら今やこの都市のシンボルになっているものもある。

つまり歴史的建造物を時代順に見て回るとは、パリの歴史をたどることでもある。この講座はそのささやかな旅といえる。

7月13日

人生の最期をどこで、 どう迎えるのか

大町 公

戦後、日本人の平均寿命は、男78歳、女85歳まで延びた。医療の急速な進歩のおかげである。これにはいくら感謝してもし過ぎることはない。

他方、ますます増える高齢者は、現代日本のかかえる最も深刻な問題の一つである。高齢者を家庭で介護することは可能なのか。近年、高齢者介護を社会的問題と見なし、〈介護の社会化〉が進められ、施設や制度の充実がはかられている。結構なことである。

しかし、高齢者問題は、同時に高齢者自身の生き方の問題である。〈延命医療〉は〈尊厳ある死〉を保証してくれない。われわれ自身が人生の最期をどこで、どう迎えるのかをしっかりと考えておかねばならない。高齢者に必要な哲学とはどのようなものか。有吉佐和子『恍惚の人』、早瀬圭一『長い命のために』、佐江衆一『黄落』、深沢七郎『楢山節考』などを取り上げつつ、この問題を考えた。

9月14日

さくらい・みず物語

小泉 泰一

稲作農業には、豊富な灌漑用水と日照が必要である。桜井は、寡雨気候で知られる瀬戸内気候帯の東端に位置する奈良盆地の南東隅にあり、寡雨地域に属している。

桜井の平坦部では、古来、稲作を中心とした農業が連綿と続けられてきたが、この稲作農業になくなくてはならない灌漑用水の確保は、この地における重要な課題であった。

人々は、その産業基盤である米づくりを継続発展させるために、ため池をつくり、川を堰止め、湧水を利用し、時に雨乞い神事をしながら命の糧として稲作農業に努めてきた。こうした取組みの中で、自然と共生しながら農耕を続けるためのさまざまな知恵が生みだされ、灌漑用水確保のための水利慣行が確立され、強い絆で結ばれた村落共同体意識が醸成されてきた。「みず」を中心にして、稲作農業における自然との共生のあり方、水利慣行などを一つの「農耕文化」として捉え、先人の知恵と工夫を検証してみたい。

10月5日

中国人の食生活

蘇 徳 昌

中国では古来「民は食を以て天と為す」と言われてきている。人々の食生活の日常の営みが食文化を形成している訳であるが、それは自ずと自然及び人文環境の強い影響を受ける。この

20年、農地改革から始まった中国の改革・開放は農村部・都市部の住民の衣食住の生活に急激な変化をもたらした。然し、「衣」と「住」が繁雑・多様・保守・中華風から簡素・均一・革新・国際風に変わるのに対し、「食」はそれほど変わらないどころか、逆行の現象さえ見られる。それは何故か。それは中国及び中国人に根強く残っている儒教・仏教・老荘思想の伝統と決して無関係ではない。とりわけ中高年齢層は現在でも「無為自然」を信奉し、それに即した食生活を頑なに守っている。講師自身中国在住45年の体験及びその、今年101歳になる父親の「養生の道」を紹介しながら、豊富多彩な中国人の食生活を解き明かしていく。

第11回 都祁村生涯学習シリーズ 奈良大学教養講座

5月18日

人間のこころ—不安と防衛—

藤掛 永良

「不安」ということばは、日常たえず口にする耳なれたことばではあるが、概念は必ずしも一定しているとはいえない。心理学事典によると、「自己の将来に起こりそうな危険や苦痛の可能性を感じて生じる不快な情動現象をいう。恐怖には特定の対象があり、可能ならば、それに立ち向かうこともできれば回避することもできるが、不安は漠然としてはっきりした対象がなく活動しているため、これに対しては不明確な危機感・無力感などが生じる。」とされる。特に新フロイト派の精神分析家カレン・ホーナイスは、「基本的不安」という概念を立て、その防衛として服従・依存、攻撃・支配、断念・孤立、の三つの生き方が生じ、そのそれぞれが理想化されて神経症的性格構造を作り、やがて自己喪失という悲劇を生むとした。

本講座においては、以上の点を詳細に考察し、お互いが一度限りの人生をいかに健やかに生きるかについて、共に考えることにする。

5月25日

子どもの危険信号、 キャッチしていますか？

森山 宏美

学習内容の中でも述べているように、学生相談員としてアドレセンス・ピリオドにかかる大学生の多様な悩みに触れてきて8年近くになるが、彼らは、何か思わぬ行動を起こす前に必ず危険信号を周囲の者たちに発信していることが分かった。

私自身の精神的な傷、いわゆる“トラウマ”の体験を中心に、さらに一般的な学生たちの問題行動に話を拡大して、私なりの解釈や発見をお話し、お集まりの皆様と一緒に考えてみたい

と存じます。例えば、

- ・あんないい子が、どうしてそのような問題行動を起こしたか分からない。
 - ・まさか、あんな明るいよい青年が、自殺する理由が理解できない。
 - ・うちの子は何故あんなに「ものぐさ」なのだろう。いくら叱っても直らない。
- そういった事例の青年の、本音の部分や真実の部分を探ってみたいと思います。

6月8日

いま、考古学はたのしい

水野正好

奈良の都一平城京に君臨した聖武天皇は、その在位中、難波宮・恭仁京・紫香楽宮と都を移していく。先き立つ大化改新時の孝徳天皇が造られた難波長柄豊碕宮は山根徳太郎先生を中心に発掘調査が実施されて以来50年を迎えた。宮の中心部が見事に浮かび上がり、3年前、たくさんの木簡が宮西北隅外で発掘され、太極殿院はその南に大蔵省が営まれていたことも確認された。その廃絶後、聖武天皇は同位置に難波宮を築いている。発掘で判明した規模はやや小さいが堂々たる構造を具えている。一方、近江の紫香楽宮は一昨年より聖武天皇執政の中心建物群が発掘され、大量の木簡の出土もあってこの宮での生活ぶりが見事に浮かび上がるようになった。この紫香楽宮で大仏建立の詔が出される。行基菩薩の援助をうけつつ造営工事が開始されるが、都への度び重なる放火で天皇は平城宮へ遷都する。そして平城京の東に寺地を求め再び大仏鑄造が始まり、やがてその動きは東大寺として結実する。こうした平城京には10万人を超える人口があり、多くの人々が役人として勤務している。彼らは暦を重視して生活する。飛鳥で昨今発掘された暦はそうした当時の人々の用いた暦の姿を眼前に示すものであった。日本の宮都はいま話題豊富、次々と新事実が登場、歴史を彩り変えていく。やはり考古学は知的な楽しい学問である。

6月15日

わかりやすい高齢者福祉と まちづくり

桂 良太郎

今なぜ「まちづくり」という用語が注目されているのかについて解説し、そこに住む人々が安心して、安全に暮らしを維持していくためにどのような手立てが必要かについてわかりやすく講義をすすめた。特に高齢化のスピードが都市部に比べて郡部の方がはやく、今後増すであろう過疎化を食い止めるには、高齢期になっても、そのまちで、安心して暮らしていけるしくみづくりが整っているかどうかで、過疎化を食い止めることができるという実例をしめしながら、「あなた自身がまちづくりの主人公」でなければならないことを示した。いままでは、

行政や社会福祉協議会などの団体に老後を任せていたが、これからは、あなた自身ができる老後の暮らし方を、できるだけ知恵をしぼって、生きがいをもてる老後の暮らしの大切さとそれを、多くの住民を巻き込みながら、環境や健康や観光（3K）を住民みずからの知恵で創造していける「まちづくり」の大切さを訴えた。

7月13日

賀茂神社と「源氏物語」

滝川 幸司

賀茂神社は、平安京守護の神社として貴族達に崇められていた。祭礼である賀茂祭（葵祭）は、和歌などにもよく詠まれ、「葵（あふひ）」を「逢ふ日」と掛けて、それ以上に登場人物の栄枯盛衰に関わる場面で、賀茂神社・賀茂祭が描かれるのが注目される。著名なのは、葵巻における車争いである。賀茂祭の見物に出た、光源氏の正妻・葵上と愛人・六条御息所の従者間で起こった車争いは、六条御息所の生霊、葵上の死を導き、結果、当時源氏に引き取られていた紫上が表舞台に登場することになる。それ以外でも、須磨へ退去することになった源氏が、葵巻の賀茂祭を回想しつつ我が身の転変を思う場面、あるいは、柏木が女三宮と密通する場面など、物語の重要な転回点に、賀茂神社・賀茂祭は登場する。

賀茂神社をキーワードに、「源氏物語」の原文に触れていこうと思う。

7月20日

中国人の食生活

蘇 徳 昌

中国では古来「民は食を以て天と為す」と言われてきている。人々の食生活の日常の営みが食文化を形成している訳であるが、それは自ずと自然及び人文環境の強い影響を受ける。この20年、農地改革から始まった中国の改革・開放は農村部・都市部の住民の衣食住の生活に急激な変化をもたらした。然し、「衣」と「住」が繁雑・多様・保守・中華風から簡素・均一・革新・国際風に変わるのに対し、「食」はそれほど変わらないどころか、逆行の現象さえ見られる。それは何故か。それは中国及び中国人に根強く残っている儒教・仏教・老荘思想の伝統と決して無関係ではない。とりわけ中高年齢層は現在でも「無為自然」を信奉し、それに即した食生活を頑なに守っている。講師自身中国在住45年の体験及びその、今年101歳になる父親の「養生の道」を紹介しながら、豊富多彩な中国人の食生活を解き明かしていく。

第16回 社会学部連携講座

【概要】

本年度は、以下の公開講座を開催した。

昨年度に引き続き外部機関（「大阪市立難波市民学習センター」）との共催事業として、「人が変わると社会が変わる？ 社会が変わると人が変わる？：個人と社会の関係を探る社会心理学」というテーマで以下に示す3回の講座を開催した。

公開講座の概要をとりまとめた小冊子（『おもしろ文化講座』）も、2004年3月に刊行された。

〈第1回〉

テーマ：個人の意見と社会の意見：日本人の意見の多様性

講師：助教授・間淵領吾

開催日：9月25日（木）

場所：大阪市立難波市民学習センター

内容：日本人は非常に均一な意見を持っている。日本人の意見は非常に多様だという二つの説があることを紹介し、いずれが正しいかを定めるためには、信頼性のある社会調査データを用いて国際比較、国内の時系列的変化などを検討する必要があることについて、社会学的見地から講演した。

〈第2回〉

テーマ：社会から二重に縛られる人：公式のルールと暗黙のルール

講師：講師・卜部敬康

開催日：10月2日（木）

場所：大阪市立難波市民学習センター

内容：人々の行動を規定する規範には、公式の規範（憲法、法律、校則など）と非公式の規範（慣習、不文律など）があることを説明し、それらがどのようなものかについて社会心理学的見地から講演した。

〈第3回〉

テーマ：“こころ”の時代を作る人・“こころ”の時代に生きる人

講師：講師・大坪庸介

開催日：10月9日（木）

場所：大阪市立難波市民学習センター

内容：アメリカでは心理療法やセラピーと呼ばれるものの中に、臨床心理や精神科などの資格を持たない者により行われている、いわゆるインチキなものがあることを示し、それがどのような社会問題を引き起こすかについて講演した。

公開講座フェスタ2003

奈良大学担当開催日：平成15年11月12日（水）
場 所：大阪府立文化情報センター
講 師：教授・水野正好
演 題（テーマ）：考古学に学ぶ ―歴史の交差点―

奈良県大学連合講座

奈良県立教育研究所、奈良県大学連合、奈良大学協力
奈良大学担当開催日：平成15年8月1日（金）
場 所：奈良大学総合研究棟（J棟）4階 多目的ホール
講 師：教授・水野正好
演 題（テーマ）：大和史を彩る考古学

生涯学習大学特別講座

主 催：奈良県社会教育センター・奈良大学協力
定 員：100人
奈良大学の担当分野：歴史及び考古学

- I. 開催日：平成15年6月14日（土）
場 所：奈良大学総合研究棟（J棟）4階多目的ホール
講 師：教授・東野治之
演 題：『聖徳太子と天寿国繡帳』
- II. 開催日：平成15年11月21日（金）
場 所：奈良県社会教育センター
講 師：教授・浅田 隆
演 題：「坪内逍遙『役の行者』と役の行者伝説」

自治体等との協力公開講座
第6回 こおりやま市民大学

主催：大和郡山市中央公民館（三の丸会館）・奈良大学協力

会場：大和郡山市中央公民館（三の丸会館）3階小ホール

テーマ：歴史・文化や今日的課題に学び、21世紀を夢と希望に満ちた人生に

定員：100人

開催日・演題・講師

回	開催日	講師	演題
1	6月7日（土）	教授 水野 正好	平城京の生活を復原する
2	6月14日（土）	教授 大村 喬一	現下の国際政治情勢
3	6月21日（土）	教授 田中 文憲	日本経済の行方
4	6月28日（土）	助教授 滝川 幸司	平安歌人と奈良
5	7月5日（土）	講師 土平 博	郡山城下と「町割図」
6	7月12日（土）	教授 高田 利武	県内高校生の友だち意識